



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	亜熱帯：西表の自然
Author(s)	高相, 徳志郎
Citation	琉球大学大学教育センター報 = University Education Center Bulletin(3): 73-74
Issue Date	2000-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42225
Rights	

亜熱帯－西表の自然

熱帯生物圏研究センター西表実験所 教授 高 相 徳志郎

平成11年度に熱帯生物圏研究センター西表実験所（熱生研・西表）で共通教育科目「亜熱帯-西表の自然」が新たに開講されたが、この科目について少し説明してみたい。

目的：西表島は豊かな自然に恵まれており、これを生かした体験的な学習から教養を広めてもらうことが新設科目の目的であった。沖縄県出身者には地元の亜熱帯の自然の理解を、他県出身者には自分の育った環境とは異なる自然の理解を深めてもらうことを意図したわけである。本年度は対象を1～4年次とし、4泊5日で2単位とし、演習を含めた集中講義とした。募集人員は、実験所の宿泊施設（学生40名の宿泊可能）と後述する公開講座のため32名とした。

開講までの経過：現森田学長が大学教育センター長をされていた時に、西表で共通教育科目を開講してもらえないかと実験所を訪れたが、これによって該当科目の早期開講が実現した。熱帯生物圏研究センターは全国共同利用施設であり、研究・教育面で他大学の研究者と学生の便宜を計ることが求められており、科目新設はこれに沿ったものでもある（熱生研の瀬底実験所では全国の生物系学生を対象にした臨海実習を開講している）。

大学教育センターの協力を得て、5月に受講登録をしてもらったが、その際に希望学生に受講の動機について記述してもらい、希望者72名から32名の受講生を選出した。開講直前のキャンセルがあり、実際の受講生は29名となった。受講生には、事前に野外観察の心得、準備について連絡をして、フィールドでの学習の注意を促し、また西表島紹介のパンフレットも同封した。

講義：講義は7月9日から8月2日まで行われたが、現地集合・解散の形をとった。日程の都合上、夕食後も講義・演習を行うという過密スケジュー

ルとなったが、特に体調をくずした者がいなかったことは幸いであった。

内容は別表に示したが、オリエンテーション、自己紹介の他、講義として、西表の自然環境・動植物・昆虫・水域生物の説明、また演習として、亜熱帯林の観察（浦内川の船上観察、またカンピレーの滝までの野外観察）、海岸・海中生物観察（海岸での生物観察法の説明及び実際の観察）、植物と昆虫の採集・標本作製、マングローブとソテツの形態観察を行った。最終日はレポート作成の時間としたが、その前日には懇親会もした。

担当は熱生研・西表の金城政勝先生と私、東海大学海洋研究所西表分室の横地洋之先生、東海大学沖縄地域研究センターの仲里長浩先生、及び環境庁西表野生生物保護センターの阪口法明先生であった。

公開講座との同時開講：目的の項で少し述べたが、「亜熱帯-西表の自然」は琉球大学公開講座「熱帯生物学実習」と同時に開講するという形で行われた。この「熱帯生物学実習」は、西日本の大学の理学系学部にも募集要項を送り、応募者9名から京都大学と高知大学から8名の参加者を得たものであった。同時開講により複数の大学の学生が共に講義と演習を受けることになり、互いにメリットがあったようである。

問題点及び今後の展望：以下に述べるいくつかの課題が問題として残ったが、これらの一部は受講生から指摘を受けたものである。

全般にスケジュールが過密であったが、この点に関する苦情等は少なかった。ただし、長期の講義を希望する声が多かった。今後、これを検討しなければならないが、西表島で台風をあまり気にしないで集中講義が可能な時期は7月中旬から下旬迄で、この間に琉球大学理学部、農学部の実習

もあり、期間の延長は難しい様にも思える。本年度は台風を避ける努力はしたものの、講義の後半にこの襲来で海での野外観察を一日ずらし、これに伴ったスケジュールの調整をしなければならなかったのが現状である。

スケジュールが過密にならざるを得ない状況では、内容が適切であることが極めて重要となるが、この点の再検討も必要であろう。亜熱帯林の観察では、ゆっくりと生物を見たり、説明を受ける時間がなかったという意見が出されたが、これは重要視しなければならない点である。

講義前後の交通手段（特に島内の移動）と食事について情報不足が生じ、受講生に気苦労をかけてしまった。今後、改善しなければならないことである。私が聞いた範囲では「亜熱帯-西表の自然」は、概ね受講生に好評であったようである。今後も立地の長所を生かし、安全面に十分配慮して、この科目の継続を予定している。これからは社会科学、人文系を含めた我々全てが環境問題に直面しなければならず、この面からも自然の理解を深める科目は重要になるであろう。

大学教育センターの方々には準備段階から様々な協力をして頂いたが、ここでお礼申し上げたい。